旧長崎大司教館における建築工事の実態

A REPORT ON THE BUILDING CONSTRUCTION WORK AT THE FORMER HOUSE OF THE ARCHBISHOP OF NAGASAKI

喜田 信代*, 羽深 久夫**
Nobuyo KITA and Hisao HABUKA

The Former House of the archbishop of Nagasaki construction work entailed the construction of a stone wall behind the Former House of archbishop, and the new construction of servants' quarters, toilets, and a basement. These were incidental to the work of the Former House of Archbishop, which was then performed.

Yosuke Tetsukawa, an attorney of the construction team, signed contractual agreements with the contractors and supervised the construction work. The construction cost exceeded 16,997,553 yen, with cash payments made prior to September 16, 1913.

The construction costing employed an actual cost plus free contract system. The construction period spanned five years, with the plan commencing in 1910, and the construction being completed around March 1915.

Keywords : *Former House of the archbishop of Nagasaki, Yosuke Tetsukawa, Construction work contract, Cost plus fee contract system, Cost of construction*

旧長崎大司教館, 鉄川與助, 建築工事請負契約, 実費精算方式, 建築工事費

1. はじめに

長崎市南山手町の国指定史跡大浦天主堂境内には、国宝の大浦天主堂(元治元年/1864)¹⁾、重要文化財の旧羅典神学校(明治8年/1875, 設計ド・ロ神父²⁾、施工者不詳³⁾、長崎県指定文化財の旧長崎大司教館(大正4年/1915, 設計ド・ロ神父と鉄川與助⁴⁾、施工鉄川與助⁵⁾(以後、司教館と表記)と旧伝道師学校(旧聖婢会本部)⁶⁾がある(写真1)。

鉄川與助(1879～1976)(以後、與助と表記)は、明治39(1903)年に鉄川組を興し、同年には桐古天主堂改修工事(明治39年/1903)に従事し、桐古天主堂改修工事中に、冷水天主堂(明治40年/1905)の構造を木造にすることを決め、冷水天主堂(明治40年/1905)と、奈摩内天主堂⁷⁾(明治43年/1910)を竣工させた。その後、鉄川組一同を引き連れて九州本土に進出し、佐賀市公教会(明治43年/1910)と今村天主堂新築工事(大正2年/1913)を竣工させ、大正2年(1913)に大浦天主堂工事係代人⁸⁾として、司教館工事に従事している⁹⁾。

現状の司教館は、北側立面の最下部の一部が地下室になっている地上3階建(但し3階は屋根裏利用)の煉瓦造で、長崎司教区の本部として建築されている¹⁰⁾。東西の両方の1階と2階にベランダがあり、内部は南北の大部屋を中廊下で結び、中央の西側には階段があり、1階と2階の各部屋には中廊下で通じている。また、司教館の裏手にあたる西側には2段の石垣があり、便所と湯場がある¹¹⁾。

大正2年(1913)から行われた司教館工事は、司教館の基礎工事ともなる地下室¹²⁾工事と、司教館裏手の整地作業で出来た土地に、小使住宅と便所並びに湯場を新築する工事を含んでいる。近年、長崎県、並びに長崎市において実測調査が行われているが、司教館工事の詳細については明らかにされていない¹³⁾。

司教館は、大浦天主堂境内の北斜面に、地形を利用して建築され、北側の表通りに面した地下室は地上階に見える。

また、司教館は、倉庫としての地下室と、1階は司教の事務室や応接室、ならびに食堂と厨房で、2階は司教の部屋と各神父の個室、3階は司教館に集う神父の宿泊施設といわれており、司教の事務室と神父の宿舎を兼ねた建築であった。この他、司教館と、その上段にある旧羅典神学校(明治8年/1875)は、共にド・ロ神父の設計である。明治初期から後期まで、主に長崎県内で宣教活動に従事してきたド・ロ神父は、旧羅典神学校との関係を考慮して、司教館は、傾斜地という大浦教会境内の敷地的な制約を踏まえたうえで、高低差を利用し、遠方からも存在感のある建築になるように、煉瓦造で一部地下室のある3階建にしたのではないかと考えられる。

司教館工事において、與助は、司教館は「司教館」や「司祭館」、「本館」と記し、附属工事は「天主堂附属工事」や「学校附属工事」と明記し¹⁴⁾、請負業者との間に、仕様書、請負契約書、心得書などの工事請負契約関係書類を取交し、工事費の精算には現金での支払の他に、支払伝票¹⁵⁾を用いている。また、史料に「附属工費用」と書かれた注文書で発注・納品された建築材料は、附属工事はるかに

写真1 大浦天主堂境内北側景観

写真は、敷地では西側にあたる右端から旧長崎大司教館、中央は旧羅典神学校、左端は大浦天主堂と、大浦天主堂の裏手の高台には旧伝道師学校(旧聖婢会本部)がある。旧長崎大司教館は大正4年(1915)に竣工しているが、大正2年(1913)には旧長崎大司教館の北側立面の最下部にあたる地下室と、裏手には石垣を造成し、小使住宅と便所・湯場を建築していた。現在は、小使住宅は解体されている。

に凌ぐ数量であることから、主な材料について検討した処、司教館工事分と併せたもので、「附属工事」とは司教館の基礎工事、或いは前段階の工事と推定できる。

* 札幌市立大学大学院デザイン研究科
博士後期課程・修士(学術)

** 札幌市立大学大学院デザイン研究科 教授・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Design, Sapporo City University, M.A.

Prof., Graduate School of Design, Sapporo City University, Dr. Eng.

筆者等は、既往の研究において、與助が鉄川組を創業後、桐古天主堂改修工事(明治39年/1903)から今村天主堂新築工事(大正2年/1913)の工事内容、工事工程、請負内容、工事費の精算方式について纏めてきた。司教館工事では、與助は天主堂工事係代人として請負業者と関係書類を取交し、工事を管理している。

洋風建築導入後である明治後期は、建築工事請負の受注形式や契約方式、建築工事の工程管理と工事費清算方法は変遷過程にあり、請負の形態も、棟梁などの専門的技術者のみならず、資本家の参入があり、請負業も成立過程にあった¹⁶⁾。また、請負契約の近代化を目指し、請負契約関係書類も整備過程にあった¹⁷⁾。

本稿は、司教館工事の関連史料を検討し、大正2年(1913)～大正4年(1915)に行われた司教館工事の工事請負契約関係書類、工事内容と建築工事費、ならびに工事工程を明らかにする。すなわち、與助は、九州地方の民間工事といえる天主堂工事で、中央における請負契約と変わらない近代的な請負を同時期に実施していたことを明らかにすることにつながる。

2. 史料について

表1は、左列から史料番号、年月日、書類の題目、工事区分、工事・材料、数量、請負又は契約(円)、書類の宛先¹⁸⁾と差出人、割印、体裁(mm)、備考

表1は、左列から史料番号、年月日、書類の題目、工事区分、工事・材料、数量、請負又は契約(円)、書類の宛先¹⁸⁾と差出人、割印、体裁(mm)、備考

なお、本稿において使用するのは與助の五男・喜一郎氏が保有する史料である¹⁹⁾。

表1 旧長崎大司教館の建築工事の関係史料

史料 No.	年 月 日	書類の題目	工事区分 司教館 附属工事	工事/ 材料	数量	請負又は契 約(円)	書 類	割 印	体 裁(mm)	備 考
1	1-A 1-E	T2 5 23	『学校附属工事石垣見積書』	○		凡250～ 300円	天主堂事務所 御中	○	241 164 2	『学校附属工事石垣見積書』
2			『本館地中室工事土掘取人主並二運搬見積書』	○				○	241 164 4	『本館地中室工事土掘取人主並二運搬見積書』
3		T2 7 15	『見積書 但し住家各棟坪数拾五坪』	○		574円	大浦天主堂	○	241 164 2	住家1棟15坪
4	4-A 4-B 4-C 4-D 4-E 4-F	T2 7 17	『請負者心得』 『小使住宅及学校附属便所並二湯場一式請負人心得書』 『追加』 『小使住宅及学校附属便所並二湯場一式請負証書』 『小使住宅新築仕様書 大浦天主堂』 『学校附属便所並二湯場仕様書 大浦天主堂』	○ ○ ○ ○ ○ ○		571円	トロー神父 代人 鉄川與助	○ ○ ○ ○ ○ ○	241 164 2	便所18坪6合7尺
5		T2 7 19	『建築売買契約証』	○		一式1000 円	大浦天主堂神父トロー様 代 人 鉄川與助殿	○ ○ ○ ○ ○ ○	241 163 1 241 163 4 241 163 1 241 163 2 241 163 11 241 163 10	『請負者心得』 小使住宅落成は8月20日。 便所・湯場落成は8月12日。
6		T2 8 1	『領収書』	○		1棟 600円	大浦天主堂 神父トロー様	○	240 323 1	天主堂敷地内の建屋解体契約書
7	7-A 7-B 7-C	T2 7 29	『二、材料納方請負証書』 『二、材料納方請負証書』 『煉瓦石買入注文書』	○ ○ ○	煉瓦 普通15万個 1680円 焼通3万個 315円		大浦天主堂 神父トロー殿 代 人 鉄川與助殿	○ ○ ○	243 165 4 244 164 2 244 164 2	石垣及土掘取工事費ノ残金67円80銭。『Michigami Risaku』と欄外に記載。8月1日より前の支払があり、その残金の領収書と考えられる。
8	8-A 8-B 8-C 8-D	未記入	『材料納方請負人心得書』 『材料納方請負証書式』 『石材買入注文書』 『材料納方請負証書』	○ ○ ○ ○			未記入	○ ○ ○ ○	243 165 7 243 165 3 243 165 2 243 165 2	表紙に「司教館」とあり、8-Bは書式で、8-Dは石材毎の価格、寸法、納期が明記されている。支払伝票のT2.9.26から請負人は平林三代吉と判る。
9		T2 6 11	『手紙』	○	煉瓦 焼通1万個		福岡縣三井郡大刀洗字今村 鐵川與助殿	○	184 603 1	煉瓦の搬入場所、支払についての問合せ。大正2年(1913)は、今村天主堂新築工事に従事。
10	10-A 10-B	T2 8 3 T2 8 19	『工手間請負人心得書』『工手間受負証書式』 『建築材料運搬請負証書』	○ ○			長崎市銭座町2丁目110番地 佐藤久米次郎 長崎市小島778番地 保証人 佐藤千代次郎	○ ○	224 169 15 224 169 4	『建築材料運搬請負証書』 『長崎市銭座町2丁目110番地』 『佐藤久米次郎』 『長崎市小島778番地』 『保証人 佐藤千代次郎』
11	11-A 11-B 11-C 11-D 11-E 11-F	T2 8 21 T2 8 22 T2 8 23 T2 8 24 T2 8 25 T2 8 26	『大浦天主堂 司教館 積入明細書』	○ ○ ○ ○ ○ ○			荷受主 長崎市大浦町 天主 堂 鐵川與助	○ ○ ○ ○ ○ ○	240 165 6 240 165 2 240 165 4 240 165 2 240 165 4 240 165 2	『大浦天主堂 司教館 積入明細書』 『大浦天主堂 司教館 積入明細書』 『大浦天主堂 司教館 積入明細書』 『大浦天主堂 司教館 積入明細書』 『大浦天主堂 司教館 積入明細書』 『大浦天主堂 司教館 積入明細書』
12		T2 8 30	『見積書』	○	砂		大浦天主堂御中	○	245 335 1	封筒入り、表紙1枚。砂の見積。
13	13-A 13-B 13-C 13-D	T2 9 15	『生石灰諸買注文書』 『砂買入注文書』 『材料納方請負証書』 『材料納方請負人心得書』	○ ○ ○ ○	生石灰 3000俵 285円 砂 50坪 375円		長崎市大浦天主堂 工事 係神父トロー殿	○ ○ ○ ○	241 162 2 241 162 4 241 162 3 241 162 7	『生石灰諸買注文書』 『砂買入注文書』 『材料納方請負証書』 『材料納方請負人心得書』
14		T2 9 25	『材料納方請負証書』	○	セメント 350樽 1312円50銭		大浦天主堂工事係 神父トロー殿 代人 鉄川與助殿	○	242 162 6	『材料納方請負証書』
15	15-A 15-B 15-C 15-D	未記入	『材料納方請負人心得書』 『材料納方請負証書式』 『瓦納方請負契約証』 『瓦注文書』	○ ○ ○ ○		50円	長崎市大浦天主堂工事係 神父トロー様 代人 鉄川與助殿	○ ○ ○ ○	243 165 7 243 165 3 244 164 2 244 164 2	『材料納方請負人心得書』 『材料納方請負証書式』 『瓦納方請負契約証』 『瓦注文書』
16		T3 4 2	『預り証』	○	瓦 50円		筑後(后)三瀬郡青木村 執行藤太郎殿	○	240 328 1	瓦請負身元保証金の預り証
17		T2 9 16 ～ T4 3 25	(支払伝票)	○			鉄川與助は、天主堂工事係代理人として、振出している。	○	130 187 8	1冊に100枚綴りで、11冊ある。小切手帳の様式を用いているが、銀行名の記載がないため小切手ではない。便所の晴子は、大正3年(1914)2月24日の前に、便所と湯場の騒や風呂の据付けは大正4年(1915)3月25日の前に、工事が行われ、一式請負人心得書に記載された落成期日の大正2年(1913)8月12日より工期は遅れた。

凡例：①史料No.1～No.6は司教館附属工事に関する史料で、史料No.7～No.17は司教館工事、並びに司教館附属工事に関する書類である。②No.15は、日付が未記入であるが、記載内容から判断して当該欄に記載した。③No.21の「支払伝票」は、整理の都合上、筆者がつけた書類名である。④史料は、この他に、日付、宛先が未記入で、カーボン複写された『材料納方請負人心得書と証書式』、『工手間請負人心得書と証書式』があることから、書式が整備されていたものと考えられる。⑤No.1～No.17の他に、『杉校立買入注文書』(板材用)、『松校立買入注文書』、『杉校立買入注文書』(柱材用)、『煉瓦石買入注文書』、『石材買入注文書』、『砂買入注文書』、『生石灰買入注文書』、『セメント買入注文書』が、それぞれ(縦243×横168)mm×2丁があることから、注文書の書式は整備されていたものと考えられる。⑥年のTは、大正を現す。

(1) 見積書

No.1『学校附属工事石垣見積書』(1-A)は、石原価、運搬賃、石工手間賃、石工手間賃及び土掘取人夫賃の見積で、『本館地中室工事土掘取人夫並ニ運搬見積書』(1-B)は、地下室工事の土掘取と運搬の見積で、工事費は凡そ250～260円の見込みで、完成予定は6月の入梅前である。日付はともに大正2年(1913)5月23日である。

No.2『見積書 但し住宅老棟坪数拾五坪』は、住宅1棟15坪、見積金額は574円、No.3『見積書 但し便所老棟坪数拾八坪六合七勺』は、便所1棟坪数18坪6合7勺、見積金額は571円で、日付はともに大正2年(1913)7月15日である。

No.12『見積書』は、大正2年(1913)8月30日付で、砂1坪13円の見積書である。

(2) 請負契約書

No.5『建屋売買契約証』は、大正2年(1913)7月19日付で、天主堂境内の既存の建屋1棟600円の売買契約書で、契約当日に代金を支払い、8月12日から解家に着手し、9月1日に材料全部を取り除く契約である。契約には「石材全部及び備品を除く」と但書があることから、建屋には石材も使われており、備品が備わっていたことが判る²⁰⁾。

(3) 仕様書

『小使住宅新築仕様書 大浦天主堂』²¹⁾(4-E)は、15坪木造住宅1棟の屋根は瓦葺で、2坪5合の室6室の建築概要と仕様が記されている。『学校附属便所并ニ湯場仕様書 大浦天主堂』²²⁾(4-F)は、18坪6合7勺の便所と湯場の建築概要と仕様が記されている。

心得書は、一式請負人心得書と、材料納方請負人心得書、並びに工手間請負人心得書がある。工事の場所を「長崎市大浦南山手乙老番地」とした上で、それぞれの心得書の後尾には、証書式が記されている。各条項はカーボンで複写されており、『家屋建築実例』²³⁾と同文である。

1) 一式請負人心得書と証書式

No.4『請負者心得』²⁴⁾(4-A)は、5項目の大工の心得が記されたもので、請負人に対する条件提示といえる。『小使住宅及学校附属便所并ニ湯場一式請負人心得書』²⁵⁾(4-B)は、請負人心得を11カ条で示したもので、便所と湯場は8月12日、小使住宅は8月20日と落成期日が記されている。『追加』(4-C)は、煉瓦と石材と土の材料支給と工事の仕上げで、手間及びトロの負担は請負金から出すと補足している。『小使住宅及学校附属便所并ニ湯場一式請負証書』²⁶⁾(4-D)(写真2)(写真3)は、小使住宅と便所・湯場の見積合計は1,145円になるが、2件の工事を一式1,000円で契約し、図面及び仕様書に従い、大浦天主堂工事請負人心得書²⁷⁾を守る請負契約である。

2) 『材料納方請負人心得書』と『材料納方請負証書式』

石材(8-A)、生石灰と砂(13-D)、瓦(15-A)の『材料納方請負人心得書』²⁸⁾は15条からなり、請負にあたっては保証人と保証品をたて、違約の場合の補償と責任も定めている。『材料納方請負証書式』²⁹⁾(8-B)、(15-B)は、請負金額、内訳、材料種別、個数、納入期限、身元保証品を記入する書式で、請負に際しては材料納方請負人心得書を遵守するとし、納入期限と、違約の場合の違約金と保証人を定めている。

3) 『工手間請負人心得書』と『工手間請負証書式』

『工手間請負人心得書』は19条で、『工手間請負証書式』³⁰⁾

(10-A)は、大正2年(1913)8月3日付で、請負にあたっては保証人と保証品を差入れ、工手間請負人心得を遵守するとしている。工手間請負金は、凡240円である

(4) 建築材料運搬請負証書

『建築材料運搬請負証書』³¹⁾(10-B)(写真4)は大正2年(1913)8月19日付で、司教館工事現場の状況に則して、停車場から天主堂工事現場までの5通りの運搬経路と運賃を定めた司教館工事固有の請負契約で、請負人は保証人を立てている。なお、身元保証金は煉瓦、並びに石材揚賃にも流用と願い出ていることから、(10-B)は木材運搬請負に際して作成され、煉瓦と石材の運搬請負も流用されたものと考えられる。

(5) 建築材料関係史料

煉瓦(No.7)、石材(No.8)、木材(No.11)、生石灰と砂(No.13)、セメント(No.14)、瓦(No.15)は、それぞれ材料別に、請負業者から材料納方請負証書、もしくは積入明細書が提出されている。

1) 『材料納方請負証書』並びに『積入明細書』

① 煉瓦 No.7の『材料納方請負証書』(7-A)は普通煉瓦15万個、『材料納方請負証書』(7-B)は焼過煉瓦3万個を牛ノ浦の西八郎³²⁾が納入する材料納方請負証書で、納期及び違約の場合の違約金が記されている。

『煉瓦石買入注文書』³³⁾(7-C)は、焼過煉瓦3万個と普通煉瓦普通煉瓦15万個の寸法、品質を規定、注文数を記している。

② 石材 No.8の『石材買入注文書』³⁴⁾(8-C)は、石材は肥前北高来郡の田結³⁵⁾産と指定し、楷段石、入口敷居石、窓皿石、杢石、地覆石、迫石のそれぞれの納期と検査について記している。

『材料納方請負証書』(8-D)は、(8-C)の注文品の単価と寸法を明記し、納期限は注文書の通りとしている。なお、No.8の8-A～8-Dには、日付、請負人の住所・氏名は未記載であるが、No.20『支払伝票』から平林三代吉と判る³⁶⁾。

③ 木材 No.11『大浦天主堂司教館 積入明細書』(11-A～11-F)は、大正2年(1913)8月21日～26日までの木材の送状で、荷受主は長崎市大浦町天主堂鐵川與助、出荷主は本人であり、宮崎線飯野駅前田島運送店の扱で代金は着払である。積入明細書には、木材の材種、寸法、数量と、立替金132円64銭、運賃221円85銭で、支払合計349円88円が記されている。

④ 生石灰と砂 No.13は生石灰と砂の『材料納方請負証書』である。『生石灰購買注文書』(13-A)は、八代産³⁷⁾の石灰3000俵285円で、『砂買入注文書』³⁸⁾(13-B)は砂凡そ50坪を375円とした契約である。砂はNo.12『見積書』と見積併せをした上で、生石灰と砂は小柳嘉吉に請負させたと考えられる。

⑤ セメント No.14『材料納方請負証書』はセメント350樽で1,312円50銭の材料納方請負証書で、請負人は納富甚吉、保証人は平原猪作で、身元保証品を添えた請負証書である。

写真2 小使住宅及学校附属便所并ニ湯場一式請負証書

写真3 一式請負証書

写真4 『建築材料運搬請負契約証』

⑥ 瓦 No. 15 は瓦で、久留米の執行藤太郎³⁹⁾の請負で、『瓦納方請負契約証』(15-C)は、城島瓦の形状、価格、納期、製造の方法、特製品とし、身元保証金を記した上で、長崎市に住む小柳嘉吉を代理としている。『瓦注文書』(15-D)は、地瓦、軒瓦、平下付、同瓦下、瓦下割、雁振、巴、角、袖、中谷瓦の数量を記したものである。

(6) 『預り証』

No. 16『預り証』(写真 5)は、大正 3 年(1914) 4 月 2 日付の瓦請負身元保証金 50 円の預り証で、差出人は筑後(后) 三潯郡青木村 執行藤太郎で、宛先は長崎市大浦天主堂工事係 神父ドロー様代理 鉄川與助である。

(7) 建築工事費清算関係史料

No. 6『領収書』⁴⁰⁾は、大正 2 年(1913) 8 月 1 日付の、石垣及土掘取工事の残金 67 円 80 銭の領収書である。内訳は左官と人夫の工手間と工事に要した材料費、及び高さ 1 尺、長さ 12 間の石垣、小便所間仕切りと小便溜桝、下水の材料と手間賃が記されている。

No. 17『支払伝票』(写真 6)は、大正 2 年(1913) 9 月 16 日～大正 4 年(1915)3 月 25 日までの工事費が精算された 11 冊の伝票の控で、控部分には「鐵川」の割印がある。與助は、工事項目毎に仕分けして支払金を精算している。

(8) その他の史料

No. 9『手紙』⁴¹⁾(写真 7)は、大正 2 年(1913) 6 月 10 日付で、大浦天主堂のド・ロ神父が今村天主堂⁴²⁾工事に従事していた鉄川與助に、焼過煉瓦 1 万個の支払と荷揚げについて問合せた手紙である。

尚、この他に『杉挽立材買入注文書』、『松挽立材買入注文書』、『杉挽立材買入注文書』、『煉瓦石買入注文書』、『石材買入注文書』、『砂買入注文書』、『生石灰買入注文書』、『セメント買入注文書』があるが、日付、数量、発注先は未記入であり、印紙、並びに署名と押印もない⁴³⁾。したがって、注文書の書式は材料毎に標準化されており、それらの書式により発注されたものと考えられる。

また、附属工事に際して、見積書と仕様書、並びに工事請負契約書を請負業者と取交していることから、司教館工事についても同様の仕様書や契約書、請負契約書が存在したものと推測されるが、現状では未確認である。

3. 司教館工事の建築材料

煉瓦と石材、及び生石灰と砂は、『材料納方請負証書』に「附属工事用」と記されていることから、その数量から工事場所を検討する。

(1) 煉瓦

煉瓦は、18 万個(普通煉瓦 15 万個、焼過煉瓦 3 万個)発注している。そこで、表 2 に、現状の司教館と地下室、および当初の仕様書(4-F)から判る便所と湯場の煉瓦の数量を積算した処、凡 159,760 個になる⁴⁴⁾。また、基礎に積まれた煉瓦の他に、便所の

仕切りや溜桝、並びに台所と厨房の間の煉瓦の棚や、煙突に少数枚積まれている。

写真 5 『預り証』

写真 6 『支払伝票』

写真 7 ド・ロ神父が鉄川與助に宛てた『手紙』と封筒

表 2 煉瓦員数調

司教館	壁厚	煉瓦員数調
便所・湯場	壁壁 1 枚積	3,500
便所の仕切り	半枚積	少数枚
本館地下室	2 枚積	17,660
北側妻壁	2 枚積	29,890
北側妻壁	3 枚積	5,040
南側妻壁	2 枚積	18,930
東側(正面)壁	2 枚積	35,010
西側(山側)壁	2 枚積	3,680
西側(山側)壁	2 枚積	34,240
煙突 4ヶ	1 枚積	11,810
合計		159,760
		+基礎+少数枚

したがって、18 万個の煉瓦は、司教館や地下室や、基礎部分や便所に使われたことが判る。

(2) 石材

『材料納方請負証書』(8-D)は、階段石(4 尺 6 寸程×1 尺 1 寸×6 寸 5 分)、入口敷居(5 寸程×1 尺 7 寸×6 寸 5 分)と入口鴨居(5 尺 8 寸程×1 尺 7 寸×8 寸 5 分)21 個、窓皿石(4 尺 6 寸程×1 尺 1 寸×6 寸 5 分) 12 個、地覆石(3 尺以上程×1 尺×6 寸)、沓石(7 寸程×1 尺×1 寸)と(5 尺 8 寸程×6 寸×8 寸 5 分)で 70 個、迫石(寸法未定)の請負証書である。階段石は 1 階ベランダから地下室へ降りる階段に用いる石で、敷居、鴨居、窓皿石、地覆石、沓石、迫石は、いずれもその寸法と数量から司教館工事用と捉えられる。

(3) 木材

No. 11『大浦天主堂 司教館 積入明細書』は、松材や樺材の納入明細で、長さ 2 間半、2 間、1 間半の材木で、合掌束、真束、極木、母屋、桁行、二階、二階梁、軒桁、挟梁、方杖、隅梁など使先を記している。したがって、これらの寸法と用途材は、小使住宅、並びに便所・湯場の材木ではなく、司教館用の材木を使先毎に買入れ、納入する日をずらしながら搬入していたといえる。

(4) 生石灰と砂

(13-C)は生石灰と砂の『材料納方請負証書』で、生石灰は、八代産の焼立生石灰 5 貫目入 3000 俵で、砂は 50 坪分である。生石灰と砂は、煉瓦の目地や漆喰の材料と考えられる。『和洋建築工事仕様設計実例 上』には、「生石灰一斗八式貫五百目」で、「煉瓦石一萬本ニハ三十石ノモルタルヲ使用ス」とある⁴⁵⁾が、長崎地方では従来、天川漆喰が使われており、ド・ロ神父は、天川漆喰に変えて生石灰と砂を捏ね合わせて使うことを推奨している⁴⁶⁾ことから、司教館工事と附属工事をあわせた材料も含まれていると考えられる。

(5) セメント

No. 14 の『材料納方請負証書』は、佐賀セメント 350 樽の材料納方請負証書である。與助は、ド・ロ神父が推奨する調合割合として、セメント土間叩き(セメント 1・砂 3 や、セメント 1・砂 4)、及び司教館部屋や巾木(セメント 1・砂 2)の調合割合を示している⁴⁷⁾ことから、セメントは司教館工事と附属工事に使われたといえる。

(6) 瓦

No. 15 は瓦の注文書で、『瓦納方請負契約証』(15-A)は、城島⁴⁸⁾の中谷深形の価格、納期、製造方法、身元保証金を契約した証書で、瓦注文書(15-C)には、地瓦 16200 枚、軒瓦 670 枚、平下付 600 枚、同瓦下 230 枚、瓦下割 720 枚、雁振 220 枚、巴 4 本、角 6 枚、袖 20 枚、中谷 30 枚の注文数量が発注されている。司教館の屋根は大棟に開口部を設けるための小屋根をもち、南側は寄棟、北側は切妻である。瓦は 1 坪に 65 枚である⁴⁹⁾ことから、発注量は小使住宅 15 坪と、便所・湯場凡 18 坪の数量を超える 280 坪程の数量になり、司教館(平面坪数凡そ 210 坪)と、附属工事用と併せた瓦の数量に凡そ合致するといえる。

(7) 建築材料の発注内容

以上の通り、(1)～(6)において、煉瓦、石材、木材、生石灰と砂、セメント、瓦の発注数量を検討した処、数量的には司教館工事と附属工事用ということが明らかになった。そこで、材料納方請負心得書や請負証書において、「附属工事用」と発注された材料は、司教館工事の基礎、もしくは司教館工事の前に行う方が都合が良い工事に必要な材料を、司教館工事用と区別して発注したものと考えられる。

4. 司教館工事の工事内容ならびに請負契約関係書類

(1) 司教館工事の工事内容

司教館（間口 35.86m、奥行 13.68m、床面積約 490 m²）⁵⁰⁾は、一部地下室を有する煉瓦造 3 階建を新築する工事である。その前段に、①司教館の裏手にあたる西側斜面に石垣工事を施工する。②司教館地下室の土掘取工事を行う。③石垣工事で新たに造成した土地に小使住宅 1 棟と、便所と湯場 1 棟を新築する。④地下室の敷地の造成後に地下室を造る。⑤司教館新築予定地にあった既存の建屋 1 棟を解体撤去する。⑥地下室工事終了後、司教館の 1 階から 3 階の新築工事を行う、という工事内容になる。

1) 石垣工事と司教館地下室土掘取工事

石垣工事と司教館地下室工事は、凡 250 円～260 円の見積で、請負人は道上利作で、工事期限は入梅の前である。No. 6『領収書』の工事内訳から、石垣は、高 1 尺 長サ凡 12 間であり、この土工事には、小便所間仕切りと、小便所溜槽の工事を含んでいたことが判る。また、『領収書』は、大正 2 年(1913) 8 月 1 日付であることから、工事は入梅前、ないし 7 月末には終了していると考えられる。

2) 小使住宅並びに便所・湯場新築工事

小使住宅は、建坪 15 坪(但 6 尺 3 寸畳敷ノ坪)の木造住宅 1 棟で、2 坪 5 合の室が 6 室あり、外部は板張、内部の壁は漆喰塗、板天井で床は板張と板畳⁵¹⁾で、屋根は棧瓦葺で、大正 2 年(1913) 8 月 20 日に落成する請負である。学校附属便所と湯場は、建坪 18 坪 6 合 7 勺で、建築概要は、基礎は割栗地形、コンクリート打洗出で、外壁は煉瓦の腰積、板壁、柱石は据付で、天井は無く内外共上鉋削りで、大正 2 年(1913) 8 月 12 日に落成の契約である。

3) 司教館地下室工事

焼過煉瓦 3 万個(7-A)の納期は、8 月 12 日～9 月 12 日であり、普通煉瓦 15 万個(7-B)の納期は、9 月 2 日～10 日毎に凡 6 万個である。これにより、司教館の地下室の煉瓦工事は、大正 2 年(1913) 8 月 12 日頃に始められていたと考えられる。

4) 建家 1 棟解体工事

No. 5 の大浦天主堂附属住宅壱棟の売買契約書は、天主堂内の既存の住宅 1 棟は大正 2 年(1913) 8 月 12 日から解家に着手し、9 月 1 日に材料全部を取り除く契約である。したがって、契約は、小使住宅と便所・湯場の竣工後であることから、附属工事用の敷地ではなく、司教館新築工事予定地にある住宅を解体・撤去し、その跡地を整地したうえで、司教館を新築したと判断される。

(2) 司教館工事における請負契約関係書類

1) 保証金と保証品

與助は、No. 2『見積書 但し住宅壱棟坪数拾五坪』と、No. 3『見積書 但し便所壱棟坪数拾八坪六合七勺』の見積に、保証人を付けさせ、No. 10 の工手間請負請負(10-A)と、建築材料運搬請負(10-B)

においても保証人を付けている。この他に、建築材料は、石材(8-A)、生石灰と砂(13-D)、セメント(No. 14)、瓦(15-A)の『材料納方請負証書』と材料別に保証人と保証品をたてさせたうえで、違約の場合の補償と責任も定めている⁵²⁾。煉瓦の請負は実績があり、木材は、出荷主・受取人ともに與助であることから、保証人は付けていない。

2) 請負契約書

『近代日本建築学発達史』⁵³⁾には、請負契約関係書類が実際に取交された事例は、「明治以来、請負契約を要する大がかりな工事は、ほとんど官公庁、もしくはそれに準ずるような大法人の発注によるものであった」として、辰野金吾等は、契約不履行など、請負業者がおこす不誠実な事件が多いことを憂慮し、英吉利法律学校新築工事(中央大学の前身)(明治 20/1887 年 7 月～明治 22/1889 年 12 月)を契機として、日本最初の工事請負契約書をつくり、従来の工事請負規定や仕様書を見直し、請負契約書の標準化を図る動きを始めている⁵⁴⁾。一方、「明治 30 年代に入っても、契約内容はともかくとして、契約方式そのものが旧態然として、英吉利法律学校新築約定書の影響をそこに見出すことはほとんど不可能であることを示している。そして民間工事にあってもものどの程度までその影響が現実化したのか、大いに疑わしいものがある。」⁵⁵⁾と、工事請負契約の一般への普及については疑問とされ、建築学会では、明治 44 年(1911)に、建築請負契約書および工事請負契約を制定している⁵⁶⁾。

與助は、明治 41 年(1908)に日本建築学会准員になっており⁵⁷⁾、明治 43 年(1910)の魚目水産学校新築工事⁵⁸⁾では、仕様書を基に木材調書を作成し、明治 45 年(1912)の若松尋常小学校新築工事⁵⁹⁾では、仕様書に基づいて予算仕訳書を作成し、一式請負で施工している。すなわち、長崎県では既に、官庁工事である小学校新築工事に於いて、請負契約関係書類が採用されており、與助は、一式請負を経験していることが判る。そのうえで、與助は、民間工事である司教館新築工事において、天主堂工事係代人として、発注者の立場で、請負業者と、一式請負契約書や、材料納方請負証書並びに工手間請負契約証書、材料運搬の請負契約関係書類を取交している。まさに、中央において関係書類が整備過程にあるなかで、與助は、司教館工事の現場で、請負契約関係書類を取交していることは、九州地方で、中央における近代的請負と変わらない請負の考え方を理解し、実践していたと考えられる。

また、写真 3 と写真 4 から明らかな様に、請負契約書の欄外に、ローマ字で請負人の住所や、氏名などが書き込まれている。これは、工事係の神父が仏人であり、神父は工事の計画は担当するが、長崎における請負の事情や日本語についても不案内な点があり、材料や職人の手配、工事や、材料、および工手間請負の業者との契約に、與助の手助けは不可欠であったと推測される。

このような点を考慮すると、與助は、天主堂工事係代人として、請負人に対しては、請負が守られない場合の補償と責任を求め、保証人と保証品を要求したもので、工事全体を統括し、管理を明確にする目的で、請負契約関係書類を整備したものと考えられる。

なお、司教館工事の請負契約書は未確認であるが、ドロ神父逝去(大正 3/1914 年 11 月 7 日)後に司教館は竣工していることから、與助は、代人として工事係を全うしたものと推量される

5. 司教館工事の建築工事費

(1) 現金による工事費精算

表1のNo.9『手紙』(6月11日)から、煉瓦の代金、並びに運搬賃の支払は、この頃に発生したと考えられる。また、No.6『領収書』(8月1日)は、土工事の残金67円80銭の領収書であることから、7月末迄に土工事費見積250～260円のうち、凡そ200円は支払、8月1日に残金を精算したことが分る。したがって、現金での支払合計は、土工事費見積250～260円と煉瓦代と煉瓦の運搬賃になると考えられる。

(2) 『支払伝票』による工事費精算

表3は、『支払伝票』による工事項目⁶⁰⁾別の支払内訳を示している。表は左列から工事項目、支払伝票の冊数を表し、支払期間は当該伝票による支払期間を示している⁶¹⁾。

それによると、一の仮設工事費580円24銭は、足場九太や、針金、人夫賃などである。二の基礎工事費3043円25銭9厘は、福田コッパ石⁶²⁾や石灰や砂、セメントと、煉瓦揚賃や煉瓦工賃などである。三の煉瓦工事費3,412円23銭5厘は、煉瓦代、煉瓦工賃、煉瓦揚賃、人夫賃である。四の石工事費821円5銭7厘は、田結石、五島石、西海石、鏡石と石揚賃などである。

木工事は、五・六・七であるが、五の木工事594円20銭7厘は、松・セン、樺、榎、杉、塩地の他、材木揚賃、木挽賃などで主に構造材であり、No.11『大浦天主堂 司教館 積入明細書』の木材と運賃304円33銭も精算されている。六の木工事2,200円1厘は、松、樺、杉、塩地、樅の他、座板などの材木代、木挽賃などで内外装工事費といえる。七の木工事91円76銭3厘は、杉や木挽賃などで仕上工事費といえる⁶³⁾。また、長崎の村川商店⁶⁴⁾や、木友商店、磯辺商店から材木を購入している。

八の金物工事費705円28銭5厘は、鋸、銅板、銅釘、洋釘、ボルト、ナット、ワッシャ、鉄物、帯鉄、丸棒、針金、銅線、回転金物、引戸車、樋受など多岐に亘り、鉄物や窓金物、梁受金物の造り賃などである⁶⁵⁾。九の瓦工事費1,438円61銭6厘は、代理人小柳へ7回に分けて支払った瓦代、竹・縄・銅釘・銅線・瓦漆喰賃、人夫賃、瓦葺賃で、第1期瓦葺代は大正3年

(1914)7月14日に矢木富三郎に支払っている。

十の塗装工事費719円79銭は、ペンキ材料、防腐剤、コールタール、ボイル油や、ワニスなどの材料費⁶⁶⁾と、大正3年

(1914)9月19日～大正4年(1915)

3月25日の塗装職人山添馬之助への支払などである。

十一の硝子工事費75円は、硝子710枚と82枚代を、大正3年(1914)8月27日～

大正4年(1915)2月10日に、志賀

商會⁶⁷⁾に支払っている。

十二の雑費232円41銭は、大正3年(1914)

3月7日の建屋祝儀⁶⁸⁾の他に、人

夫用茶菓子、車賃、ハケ、ホーキ、

コンパス、印紙、領収書、様式通

帳などの雑費や文房具費である。

十三の左官工事費83円7銭は、

大正3年(1914)1月24日に左官11人と、柴田商店への支払などである⁶⁹⁾。十四の便所・湯場新築工事費1,509円17銭は、工手間請負の佐藤久米次への支払と、煉瓦工、石工、大工賃の他、セメント、竹、五島石、西海石、煉瓦の材料代と運賃、小便器と大便器各4個の造り賃、取付金物、樋と電球7個代などである。十六の小使住宅新築工事費166円57銭は、村川商店へ材木15坪代と、西海石代である。

この他、学便42円86銭、学湯115円7銭5厘、学廊・学校・階段205円83銭5厘、借家⁷⁰⁾2円4銭、窓11円40銭、保証金100円、神父(チリ・ドロ・浦川)91円37銭、弈具庫・御像台72円31銭、トサ119円3銭と、数字以外で表された工事費用があり、合計は16,433円22銭3厘である。なお、「学便」は便所で石垣工事に含まれる小便所の工事費、「学湯」は湯場で鉄川大工8日半賃と、長州風呂と焚口代など、「学廊・学校・階段」は司教館1階と2階のベランダ及び階段で、鉄川大工38日賃と、人夫賃、土管、瓦代である。

「窓」は佐藤久米次へ18日賃であることから、窓の運搬賃と考えられ、「保証金」は納富と佐藤、小柳へ保証金の返還金で、「神父(チリ・ドロ・浦川)」は神父に渡した費用、「弈具庫・御像台」は司教館の収納庫、並びに祭壇工事で、この他にトサ(與助の妻)の費用と考えられる⁷¹⁾。

(3) 司教館建築工事費

司教館の建築工事費は、現金で清算された564円33銭と、煉瓦代と煉瓦や材木の運搬賃と、木挽賃、ならびに支払伝票で精算された16,433円22銭3厘を併せた16,997円55銭3厘を超える金額と考えられる。

この他、No.6『領収書』(8月1日)の宛先は、「大浦天主堂 神父ドロウ様代人 鉄川與助殿」であり、No.11『大浦天主堂 司教館 積入明細書』の木材と運送料304円33銭(8月21日～26日)も「大浦天主堂 鐵川與助」で、着払の契約である。また、大正2年(1913)9月16日以降の『支払伝票』には、年月日、支払先、並びに目的を、

表3 『支払伝票』による工事項目別の支払の内訳

		支払伝票	1冊目	2冊目	3冊目	4冊目	5冊目	6冊目	7冊目	8冊目	9冊目	10冊目	11冊目	小計
	工事項目	支払期間	T2.9.16- T2.10.20	T2.10.21- T2.11.29	T2.10.30- T2.12.28	T2.12.28- T3.2.4	T3.2.4- T3.3.17	T3.3.17- T3.5.15	T3.5.15- T3.7.4	T3.7.4- T3.9.3	T3.9.3- T3.10.30	T3.12.19- T4.2.22	T4.2.22- T4.3.25	
	一	仮設工事	240.445		179.37		32.6	105.325	22.5					580.24
	二	基礎工事	602.859	868.41	148.465	36.01	49.85	216.915	504.482	364.72	186.895	64.65		3043.256
	三	煉瓦工事	514.39	275.675	348.99	748.66	1105.95	294.385	42.22	37.75	44.22			3412.235
	四	石工事	100.28	74.227	64.15	88.7	154.45	211.4	21	9.45	97.4			821.057
	五	木工事(構造)	5.74	12.112	214.092	109.865	82.32	9.862	24.58	42.26	93.376			594.207
	六	木工事(内外装)	32.102	54.981	366.068	273.463	376.64	153.02	116.72	22.05	595.09	209.867		2200.001
	七	木工事(仕上り)	36.902	2.008	0.73	7.168	6.045	8.12	8.79		22			91.763
	八	金物工事			33.28	73.94	90.35	141.28	14.57	110.74	151.515	89.61		705.285
	九	瓦工事					16.82	239.36	534.52	525.321	42.97	79.625		1438.616
	十	塗装工事			2.2			8.16	2.61	11.8	89.97	483.855	121.195	719.79
	十一	硝子工事								50			25	75
	十二	雑工事		3.6	6.48	5.31	108.11	59.82	12.5	2.12	14.73	18.67	1.07	232.41
	十三	左官工事	2.44			13.42	1.5			39.51	26.83			83.7
	十四	便所・湯場・門番所										1091.39	417.78	1509.17
	十六	小使住宅	15											15
	学便		42.02				0.84				151.57			194.43
	学湯							100.91	6.94	7.225				115.075
	学廊・学校・階段							122.53	58.645	24.66				205.835
	借家		1.78		0.26									2.04
	窓			11.4										11.4
	保証金						10		60	30				100
神 父	チリ		2.68											2.68
	ドロ					0.8			8.86					9.66
	浦川								22.25	9.35		15.05	32.38	79.03
	葬具庫・御像台												72.31	72.31
	トサ		119.03											119.03
	小計		1715.67	1302.41	1364.09	1357.34	2035.47	1671.09	1461.19	1286.96	1516.57	2052.72	669.735	16433.22

凡例：①支払伝票は、大正2年9月16日から、大正4年3月25日までの工事費清算の記録である。②工事項目は、田中豊太郎編(辰野金吾等閲覧)：和洋建築工事仕様書(上・下)、工業書店建築書院、1905.1908に示されている工事区分による数字で表したものと考えられる。③「一」から「十六」の数字に適合すると考えられる工事内容を、筆者の判断により右列に記している。④工事費は、大正2年9月16日以前は現金で清算されていたと考えられる。⑤司教館工事中の、大正3年9月に中町天主堂(明治29年建築、設計バビーン/神父、施工者不詳、被爆後復元)の屋根工事29円32銭6厘を行い、大正4年3月に十六番館(明治初年築、設計・施工者不詳)の塗装工事45円3銭を行っているが、これは、司教館工事ではないことから、除外している。⑥工事項目の「十五」は、含まれていない。

伝票に明記している。換言すると、使用目的を教会に明示したうえで、その都度、代人である奥助を経由して、教会から実費を受取る実費精算方式⁷²⁾で精算されたもので、支払は教会である。

なお、何故、現金から『支払伝票』の精算に替わったか考察すると、今村天主堂新築工事（大正2年/1913）は工期が重なっており、工事費総額は凡3万円となる⁷³⁾ことから、工事費総額が膨らんだことが『支払伝票』での精算に繋がったとはいえ、大浦教会代人に就任した奥助が、施主である教会と請負人との間で、工事費の支払細目を明確にする目的であったと推測される。また、実費精算方式は、予め定めた工事契約の報酬を支払う精算方式であるが、司教館工事に関する奥助の報酬は史料からは不詳である⁷⁴⁾。

6. 司教館工事における工事工程ならびに請負者の構成

(1) 工事工程

『支払伝票』における精算は、工事は終了後、材料費は手付など特筆されている支払の他は、材料納入後と判断される。したがって、支払期日とは若干のずれが予測されるが、工事工程が再現できると考えられる。そこで、図1に、明治43年(1910)から大正4年(1915)4月までの司教館工事の工事工程を表している。司教館新築工事の計画は、明治43年(1910)から始められた⁷⁵⁾。そこで、司教館北側の一部を地下室にし、西側に造成した土地に小使住宅と便所・湯場を新築する計画で、大正2年(1913)5月と7月に見積をとっている。並行して、建築材料の煉瓦、石材、木材、生石灰と砂、セメント、瓦は発注され、大正2年(1913)6月11日には、焼過煉瓦は納入段階に入っていたといえる。また、材料納付請負契約と工手間請負契約、材料運搬請負契約を請負人と取交している。

大正2年(1913)は、入梅の前に、司教館の基礎ともなる地下室の土掘取工事を終了し、引き続いて、石垣工事、並びに司教館の基礎工事を行っている。仮設工事は、9月から大正3年(1914)5月まで行われている。地下室は煉瓦造であることから、6月には煉瓦工事が始まり、大正3年(1914)9月まで行われている。煉瓦工事で並行して、石工事が行われている。木材は大正2年(1913)8月21日から順次入荷していることから、地下室から順に上層階に向けて構造材を組立てている。また、11月8日は、人夫が窓を搬入していることから、10月末頃には窓枠の取付段階に入っていたと考えられる。金物工事は、大正2年(1913)12月から大正3年(1914)10月と、12月から大正4年(1915)2月に行われている。大正3年(1914)は、1月と、7月から9月に左官工事が行われている。地下室から順に煉瓦を積み、最後に棟を上げ、3月7日に建屋の祝儀が支払われ、5月から7月頃、学校・階段・廊下の内外装工事が行われたと考えられる。瓦代は6月に支払われ、7月14日に瓦葺賃が支払われていることから、この頃、瓦工事は終わったと考えられる。硝子工事は、8月27日～大正4年(1915)2月10日頃に行われ、並行して、塗物工事は、9月19日～大正4年(1915)3月25日頃に行われている。

便所・湯場の工事は、大正2年(1913)8月より前に土工事が終了し、大正3年(1914)2月頃、窓硝子を入れ、4月に長州風呂を据え付けている。小使住宅は、9月24日に15坪分の材木代を支払っていることから、8月20日より若干遅れて落成したものと考えられる⁷⁶⁾。

大正4年(1915)は、3月に、司教館の収納庫、および祭壇工事が行われ、厨房のガス工事と、電燈の工事が行われている。以上の検

図1 司教館工事の工事工程

討から、工期は計画から凡そ5年程が費やされたと考えられる。

また、『小使住宅及学校附属便所并ニ湯場一式請負人心得書』（4-B）では、工事の落成期日は、便所・湯場は大正2年(1913)8月12日、小使住宅は大正2年(1913)8月20日と決め、遅延の場合の損害金も定めているが、『支払伝票』では、小使住宅は大正2年(1913)9月から10月、便所・湯場は大正3年(1914)12月から大正4年(1915)3月に工事費を精算している。材料費や工事費の精算は、工事終了後、もしくは材料購入時と推定すると、硝子は、大正3年(1914)12月と大正4年(1915)2月で、大正4年(1915)1月に便器を製作し、3月に司教館の収納庫を造り、便所・湯場と門番所の樋や、便器の取付と、ガスと電燈工事を施工し、風呂桶と焚口は大正4年(1915)4月に据付けたと考えられる。すなわち、附属工事は、司教館工事の進捗状況に併せて、本館工事の工事内容と工事工程と一緒に仕上げたもので、工事は同時期に進められた。

(2) 請負者の構成

図2に、旧長崎大司教館工事における請負者の構成を示した。

図2 旧長崎大司教館における請負者の構成

凡例：①旧長崎大司教館工事は、本館工事と附属工事がある。②本館工事における関係者は、史料No.17『支払伝票』の記載内容から記入している。③工手間、ならびに材料運搬請負の請負人と保証人は、史料No.10をもとに記載している。④建築材料は、史料No.7.No.11.No.13.No.14.No.15をもとに記載している。

司教館工事の工事係はド・ロ神父で、奥助は大浦天主堂工事係代人である。本館工事は、図 1 の工事工程の項目に準じて表したもので、内容は『支払伝票』おける支払先から記載している。附属工事のうち、石垣工事と司教館地下室工事の請負人は道上利作である。小使住宅と便所・湯場の新築工事は一式の工事として、岡本藤寿、道上利作、山崎徳太郎の請負である。

主な建築材料は、煉瓦は牛ノ浦の西八郎、石材は田結の平林三代吉、生石灰と砂は小柳嘉吉、セメントは佐賀の納富甚吉、瓦は福岡県城島の執行藤太郎の請負である。セメントと瓦は、長崎県外の請負人になることから、セメントは平原猪作を保証人とし、瓦は小柳嘉吉を代理人としたと考えられる。なお、木材は宮崎の田島運送店が運搬請負人であるが、受取人と送り主は共に奥助であることから保証人はつけていない。この他に、工手間請負、並びに建築材料運搬請負の請負人は佐藤久米次、保証人は佐藤千代治である⁷⁷⁾。

7. まとめ

司教館工事は、司教館を新築し、司教館裏手に石垣を造成し、司教館附属工事である小使住宅と便所と湯場を新築する工事であった。

鉄川奥助は、大浦天主堂工事係代人として、発注者の立場で、請負業者と、請負契約関係書類を取交し、工事を管理している。

建築工事費は 16,997 円 55 銭 3 厘を超える金額で、大正 2 年(1913)9 月 16 日以前は現金で支払われ、以降は『支払伝票』で精算している。

工事費は、使用目的を教会に明示したうえで、その都度、教会から実費を受取る実費精算方式である。

工期は凡そ 5 年程を費やし、明治 43 年(1910)に計画が始められ、大正 2 年(1913) 6 月頃基礎工事を行ない、大正 4 年(1915)3 月頃に、司教館、小使住宅、便所・湯場が竣工している。

謝辞

長崎県教育庁学芸文化課、長崎市文化観光部文化財課、長崎大司教区並びに、大浦天主堂境内管理神父様には、ご教示を頂き、調査には協力頂きました。また、鉄川喜一郎氏には、史料の提供を頂きました。記してお礼を申し上げます。

注

- 1) 大浦天主堂は現存する日本最古の天主堂建築で国宝に指定されている。カトリック大浦教会百年祭執行委員会編：カトリック大浦教会 百年の歩み 1965, pp. 77～116, 1965. 6. 日本建築学会編：総覧 日本の建築 9 九州沖縄編, p. 149. 1994. 2
- 2) Marc Marie de Rotz, (1840. 3. 27-1914. 11. 7) 仏人。カトリック宣教師。明治元年(1968)プチジャン神父と共に来日。大浦天主堂に石版所を設け、1971 年から 1973 年には横浜に移り、1973 年から長崎の外海町出津に移り、司祭として救済活動を続ける。また、建築家としても優れ、作品には旧羅典神学校、出津教会と大野教会がある。日本キリスト教歴史大辞典編集委員会：日本キリスト教歴史大辞典, p. 968, 1998. 8. 並びに、ド・ロ神父記念館：マルコ・マリ・ド・ロ神父小伝, 1995. 8. 15.
- 3) 日本建築学会編：総覧 日本の建築 9 九州沖縄編, p. 149. 1994. 2.
- 4) 鉄川奥助(1879～1976)は長崎県五島列島を中心に、長崎県、福岡県、佐賀県、熊本県に数多くの教会堂を建築している。明治 12 年(1879)1 月 13 日長崎県南松浦郡新魚目町丸尾郷に大工鉄川与四郎の長男として生まれ、長崎県南松浦郡榎津尋常小学校を卒業(1894)すると大工の修行に入る。明治 39 年(1906)土木建設業鉄川組設立。明治 41 年(1908)日本建築学会入会(準員)(建築雑誌 第 22 輯)。鉄川奥助の入会資格は「大工」である(建築學會：建築雑誌二百六十三號附録 建築學會會員住所姓名録, p. 90, 1908. 11)。大正 2～12 年(1913～1923)魚目村村会議員。昭和 19 年(1944)鉄川組を第一土建会社に統合。同社取締役役に就任。昭和 24 年(1949)鉄川工務店に名称変更。

昭和 34 年(1959)7 月建設大臣表彰、11 月黄授褒章受章、昭和 42 年(1967)11 月勲五等瑞宝章受章。昭和 51 年(1976)7 月 5 日横浜市にて没。鉄川喜一郎氏よりの聞き取りによる。

- 5) 旧長崎大司教館は、当初は司祭館として建築され、現在は大浦天主堂管理神父館および神学生の寄宿舎になっており、2011 年に長崎県文化財に指定されている。以下の文献に記載がある。日本建築学会編：総覧 日本の建築 9 九州沖縄編, p. 155. 1994. 2. 桐敷真次郎：大浦天主堂，中央公論美術出版, p. 18. 1968. 9 では、「司祭館の建築も、天主堂の整地も小山の仕事であつたろう」と、大浦天主堂の請負者である小山良輔の仕事とされている。日本放送出版協会：ある明治の福祉像ド・ロ神父の生涯, pp. 192-196, 1995. 8.
- 6) 最初は伝道師学校として建てられ、戦後聖婢姉妹会本部となり、現在は空家。長崎市教育委員会：南山手の洋館―伝統的建造物群保存地区保存対策事業報告書, 1977.
- 7) 「奈摩内天主堂」は、現在は、「青砂ヶ浦天主堂」と名前をかえている。
- 8) 奥助が発注者側の代人になった経緯は明らかにされていない。代人となった経緯を示す資料は未発見のため調査を継続している。
- 9) 喜田信代, 羽深久夫：鉄川奥助の明治期の建築経歴と桐古天主堂の請負内容, 日本建築学会計画系論文第 566 号, pp. 161～167, 2003. 4. 喜田信代, 羽深久夫, 本間博文：冷水天主堂における鉄川奥助の請負内容, 日本建築学会計画系論文第 568 号, pp. 133～139, 2003. 6. 喜田信代, 羽深久夫, 本間博文：奈摩内天主堂における鉄川奥助の請負内容, 日本建築学会計画系論文第 578 号, pp. 147～154, 2004. 4. 喜田信代, 羽深久夫, 篠野志郎：今村天主堂建築工事における九州地方の建築職人・鉄川奥助による施工管理の実態, 日本建築学会計画系論文第 650 号, pp. 947～954, 2010. 4. また、工事の精算方式については、喜田信代, 羽深久夫：明治期の桐古天主堂改修工事における鉄川奥助の工事費精算方式, 投稿中。
- 10) 司教館は、教区本部ともいえる建物で、司教および司祭たちは司教館に住み、事務所と住まいを兼ねた建物といえる。長崎大司教区のご指導による。なお、長崎司教区は、昭和 32 年(1959)に大司教区に昇格したことにより、長崎大司教館となっている。カトリック大浦教会百年祭執行委員会編：カトリック大浦教会 百年の歩み 1965, p. 145, 1965. 6. 30.
- 11) 大浦天主堂境内配置図には小使住宅は居宅(その後建築された居宅も 2003 年解体)と記され、長崎大司教館の西側に昭和 60 年(1985)建築の便所がある。注 10) 文献 p. 172、および、大浦天主堂からの聞き取りによる。
- 12) 奥助は、史料に「地中室」と表記しているが、司教館地下室のことだと考えられることから、本稿では地下室と表記する。
- 13) 長崎県世界遺産登録推進室：「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」構成資産候補建造物 調査報告書, 長崎県, 2011.
- 14) 『天主堂附属工事』については、司教館本体工事及び附属工事とする立場もあるが、本稿では、奥助の史料に沿って、司教館の附属工事とする。
- 15) 『支払伝票』は、表紙は一部破損又は全部が欠損しており、寸法は(縦 130×横 187×厚 8mm)で 1 冊に 100 枚が綴じられている。右側(縦 130×横 53×厚 8mm)は「第 號、金、右金御渡被下候也、年月日、殿」と印刷され、ミシン目が入り切り離せる様式である。左側(縦 130×横 138×厚 8mm)は控で「年月日、第 號、金、姓名、摘要」と記されている。伝票の控部分の最初の頁には、鉛筆で、時系列に㊶から㊶の番号と、「司教館」と記され、日付、支払先、支払目的が記されていることから、司教館工事の工事費が精算されていると考えられる。また、この伝票は「小切手」に類似しているが、金融機関名や小切手の振出地が記入されていないため、「小切手」ではない。なお、「支払伝票」とは、書類の整理上、筆者がつけた名称である
- 16) 明治期における建築工事請負は、設計と施工が分離し、見積は、新しい建築材料と構法による積算技術が必要となり、施工の監督・指導は建築技術者が行っている。また、工事の施工方式は、直営から一式請負に移行し、契約関係書類も整備過程にある。建築請負については複数の文献資料があるが、主に以下の書籍を参考にした。古川修・永井規夫・江口禎：新建築学大系 44 建築生産システム, 彰国社, pp. 87-229, 1982. 10.
- 17) 鷲尾九郎：近代日本建築学発達史 4 編 建築経済, pp. 581-597, 2001. 12.
- 18) No. 9 の手紙の宛名は「福岡県三井郡大刀洗字今村 鐵川奥助殿」であるが、その他は、「天主堂事務所御中」、「大浦天主堂 ドロー神父 代人 鉄川奥助」、「大浦天主堂神父ドロー様 代人 鉄川奥助殿」、「工事係 神父ドロー殿」、「長崎市大浦天主堂工事係」、「神父ドロー殿」、「長崎市大浦天主堂 鐵川奥助殿」、「大浦天主堂御中」、「長崎市大浦天主堂 工事係神父ドロー殿」、「大浦天主堂工事係 神父ドロー殿」と書かれている。これは、司教館とその附属施設は大浦天主堂の敷地内にあることから、宛名に

- 「大浦天主堂」と書かれたものと考えられる。
- 19) 本研究の史料は、與助の五男、喜一郎氏の所有する史料である。喜一郎氏所有の図面は、川上秀人博士により「図面リスト」として整理されているが、「図面リスト」には、旧長崎大司教館の図面は含まれていない。なお、與助の史料は、当初、関係者に分散して保管された経緯もあることから、今後発見される可能性も捨てきれず、調査を継続していく。
- 20) 「解体された建屋」は、撤去後、どこにどのように再利用されたかは、史料からは確認できないことから不詳である。
- 21) 小使住宅は、建坪 15 坪（但 6 尺 3 寸畧敷ノ坪）で、2 坪 5 合の室が 6 室あり、「別紙図面之通り」と図面は別図で示している。 建築概要は、木造住宅 1 棟、基礎は割栗地形、コンクリート打、柱は石据、外部は板張、内部の壁は漆喰塗、板天井で床は板張と板畳であり、屋根は桧瓦葺である。 仕様は地形之部、石方之部、木材並ニ大工方ノ部に分け、地形の部は、縄張、遣形、水盛、壺掘、取設堅石割栗石の仕様を記している。コンクリートは、モルタルを水湿し洗砂利を充分練り合わせ、調合の割合はセメント 1、生石灰 2、砂 4、洗砂利 10 である。石方の部は、遣方、柱石、床束石の仕様を記し、モルタル調合割合はセメント 1、生石灰 2、砂 4 である。木材並ニ大工方の部は、軸組、床組、外壁、小屋組、瓦葺、内部仕上げ、外廻りの仕様を記し、別に図面に示している。
- 22) 便所と湯場は、建坪 18 坪 6 合 7 勺で、割栗地形「コンクリート」打洗出煉瓦腰積木板壁柱石据付天井ナシ内外共上鉋削りで、「別紙図面之通り」と図面は別図で示している。仕様は遣方水盛、側通間仕切柱石下、コンクリート、遣方、煉瓦、柱下石湯場敷居石、小便所及全溜桷、大便所溜桷に分けて記している。
- 23) 一式請負人心得書 36 条と一式請負証書式、工手間請負人心得書 19 条と工手間請負証書式、材料納方請負人心得書 15 条と材料納方請負証書式が規定されている。辰野金吾・葛西萬司共著：家屋建築實例，須原屋，1908. 9。
- 24) 『請負者心得』は、一小屋材ハ大節腐割レナキモノ 瓦身ハ一寸二分以内 一内部見掛り材小節材 瓦身六分以内 但し天井材建具材見掛り鴨無節正角材 一外部身係り材大節腐割レナキモノ 身瓦一寸以内 一釘大小共正規ノ寸法モノヲ仕用スル事 一図面ト仕様ト相違ノ所ハ係員ノ指揮ニ従フ事。『請負者心得』(4-A)には、小屋材、内装材、外装材は大節や腐割れが無いもので、天井材、建具材は小節がないもの、釘は正規の寸法のものを用い、図面と仕様と違う所は係員の指揮に従うとされている。
- 25) 『小使住宅及學校附属便所并ニ湯場 一式請負人心得書』は、以下の 11 項目が墨書されている。1. 材料は新材を用い、大節や腐れ割れの無いもので、見える所は 全部鉋削りし、但し便所の床は見えないけれど鉋削りをし、天井と建具材は節のない角材とする事。2. 鉄物や釘は正規の寸法のものを使用する事。3. 些かな部分と雖も本工事附帯のものは総て指揮の通り請負費内で、仕様や図面中に不明瞭な点は掛員の指示に隋い着手する事。4. 工事中の取締その他危険な場合に際しては、予防を命じる事。5. 建築材料及び物品は掛員の検査を受ける事。6. 係員の指示に従わない職工は、直に工場を出入を差止める事。7. 工事は逐次出来た部分から充分保護し損傷を防ぐ事。8. 同一種類が 2 個以上ある場合は、先づ 1 個を仕上げ、検査を経た後、全部に着手する事。9. 工事の落成は学校附属便所と湯場は本年 8 月 12 日、小使住宅は本年 8 月 20 日とする。10. 請負代金の払渡は、材料は全部を工場に持込んだ上で全金額の 1/3、建家は瓦葺の上で 1/3、落成した上で残金を拂渡す事。11. 心得書に請負人が違背し当方へ損害をかけた時は、何条に限らず係員はその損害額を調査し、倍額を請負人に支拂はせる事。 大正貳年七月十七日 請負人 岡本藤寿㊤ 右全 道上利作㊤ 右全 山崎徳太郎㊤ 大浦天主王神父ドー様 代人 鉄川與助殿
- 26) 「一金壹千円 建家棟数等別紙図 面及ヒ仕様書之通り 右今般長寄市大浦南山手乙壹 番地御指定ノ所へ御新築被成候 工事一式請負申候義実正也然ル上ハ 御下渡シノ図面并ニ仕様候及ビ大浦天主堂工事請負人心得書共固ク相守リ 申可候依而契約書一札如件」である。
- 27) 「大浦天主堂工事請負人心得書」の書類名では筆者は未確認である。司教館は大浦天主堂境内にあることから、司教館工事における請負人心得書を示したものと考えられる。
- 28) 『材料納方請負人心得書』は 15 条で、『家屋建築實例』と同文である。辰野金吾・葛西萬司共著：家屋建築實例，須原屋，pp. 34-39, 1908. 9。
- 29) 『材料納方請負証書式』(8-B)は、材料別に請負金額、内訳、材料種別、個数、納入期限、身元保証品を記入する書式であるが、これらは未記入である。引き続き、「長崎市大浦南山手乙壹番地の附属工事にあたり、前記御建築材料納方請負を仰せつかり、請負にあたっては、御注文書、材料納方請負人心得書を遵守し誠実を旨とし、前記日限通りにそれぞれ納入し、万一、その一部でも約定日限に納付できない時は日限後、皆済迄、5 日毎に請負総金高の 2/100 を差出し、前記身元保証人を立て保証品売却の上、そ

- の代金を支払、保証人は本人と連帯責任を負う」とあり、請負が守られない場合の保証と責任も定めている。他の『材料納方請負証書式』には日付、請負人の住所・氏名を記し捺印しているが、石材の証書には記載がない。
- 30) 『工手間請負証書式』は、「而手間請負人心得書繪圖面仕様書等 遵守シ誠実ヲ旨トシ着般ノ都度無相違運搬 仕候万日限ヲ怠タリ候節ハ日限后五日毎ニ講 負総高ノ壹百分ノ式ヲ差出可申候而前記 身元保証金差シ入レ左ニ署名スル保証人相立 申候若シ自分ヨリ貴工事係へ支拂フベキ金 円ヲ支拂ハザルトキハ保証金ヲ以テ右支拂ヒニ御 充用被下度又保証人ハ総而ノ事項ニ付本人 ト連隊責任ヲ負ヒ可申候為后日証書依而 如件 大正貳年八月三日 長崎市錢座町二丁目壹百拾番地 佐藤久米次印 長崎市小島七百七拾八番地 保証人 佐藤千代次 長崎市大浦店天主堂工事係 神父ドー様 總高凡金二百四拾円位」である。
- 31) 『建築材料運搬請負証書』は、
「一木材運搬老肩ニ付金五錢也	一 停車場ヨリ下置場迄之賃錢
一全老肩ニ付金七錢也	二 停車場ヨリ現場迄ノ賃錢
一全老肩ニ付金參錢也	三 下置場ヨリ現場迄ノ賃錢
一全老肩ニ付金四錢也	四 波止場ヨリ現場迄ノ賃錢
一全老肩ニ付金參錢也	五 波止場ヨリ下置場迄ノ賃錢
- 但シ水揚並ニ貨車下ロシヨリ現場積 立テ迄ノコト 尚弁テノ置場ヨリノ運搬ト停車場ヨリノ 運搬トハ同一ナル事」と停車場から、現場までの運搬経路と運賃を取り決め、「但シ身元保証金ハ煉瓦並に石材揚ケ賃ニ 對スル保証金ヲ本証書ニモ流用願上候」とある。
- 32) 桐古天主堂と奈摩内天主堂工事には西八郎の牛之浦煉瓦を用いている。
- 33) 『煉瓦石買入注文書』(7-C)は、煉瓦 15 万個（但し上等 3 割、中等 5 割、下等 2 割とし、上等と中等下等の 2 種に取り分ける）と、焼過煉瓦 3 万個（但し上等 3 割、中等 4 割、下等 3 割とし、上等と中等下等の 2 種に取り分ける）の注文書で、見本の通りの品質に限り、代金は現品の納入高にに応じ掛渡し、残金は皆納入の後支払う注文である。発注者、請負人の押印はなく、注文内容を写した書面である。
- 34) 『石材買入注文書』(8-C)は、肥前北高来郡の田結産注34の楷段石、入口敷居石、窓皿石、杓石、地覆石、迫石の注文で、入口敷居石の納期は 9 月 15 日、迫石の納期は 10 月 15 日、その他は 10 月 10 日の納期であり、石材は見本の通りの品質で斑がない上等品に限り、納品は海岸へ着船の上、検査を受けるもので、発注者、請負人の押印はなく、注文内容を写した書面である。
- 35) 南高来郡田結：明治 22 年～昭和 30 年(1889-1955)の長崎県北高来郡の自治体名。角川日本地名大辞典」編集委員会編：角川日本地名大辞典 42 長崎県, p. 616, 1987. 7。
- 36) No. 8 の石材の書類の見開きの頁に割印があるが判読困難である。支払伝票の大正 2 年 9 月 29 日以降、平林三代吉は、田結産石材を納入している。
- 37) 八代は、熊本県中部、八代海に臨む工業地帯。石灰石資源を背景に関連企業が立地した。相賀徹夫：万有百科大事典 8, p. 1130, 1974. 2。
- 38) 『砂買入注文書』(13-B)は、砂凡 50 坪の注文書で、砂枿は長さ 12 尺、巾 6 尺、高さ 3 尺で納期は 12 月 30 日とし、初回の納入は 9 月 20 日で、雨天を除き 7 日間に 7 坪を完納し、引き続き枿が空いた時は雨天を除き 5 日間に 4 坪を納めるとしている。
- 39) 瓦石炭販賣 久留米緋製造業である。
- 40) 『領収書』の内訳は以下の通りである。 一金 參円六拾錢 石工四人、一全 貳円四拾錢 男夫四人、一全 九拾錢 女三人、一全 壹円貳拾錢 石灰小俵拾俵、一全 七拾錢 セメン七升、一全 八拾錢 左官壹人、一全 貳拾壹錢 砂三ケ、㍻九円八拾壹錢 但シ下水ノ分と、一金 參円地ナラン、一全 參円六拾錢 張石、一全 參円 石垣上下 下水ノ天川、一全 壹円 小便所間仕切石代、一全 貳円 小便溜桷、一全 貳円拾錢 石垣 高壹尺 長サ凡十二間、計 拾四円七拾錢、合計 貳拾四円五拾壹錢[ママ]參円、外ニ四円五拾錢、貳拾七円五十錢ノ所ヲ 貳拾六円。
- 41) 手紙は「ド・ロ神父書簡」として、既に公開されている。博物館明治村編：明治のキリシタン―信仰のかたちと心―, 名古屋鉄道会, p. 59, 1994. 9。その内容は「拜啓 梅雨の候ニ候得共益々御健勝奉賀候御注文の焼過煉瓦一萬個 到着仕候 代價は壹個壹錢〇五毛の 通知書及び運賃長崎港まで壹個一厘四毛の送込に接し候 荷揚げの為に者石工道上某 に週旋を頼み候度壹個に付 天主堂境内まで一厘貳毛にて 貴下と契約整ひ居り候由 申候運送船の到着の節ハ 日曜日に當り居り候を以て荷揚げ 滞り申候故船主は急ぎ且又波止場 ハ假り置場の許可無之候故船より 且つ且荷揚げするを船主にて好ま ざるより 貳円の水揚げ賃を出して近傍の明地ニ荷揚げ致候由 此水揚げ賃は誰の負擔に属す べきか貴下より何の通知も 無之候故 実に困却し居候間 右煉瓦の件ニ付至急明細なる 御通知あらん

- ことを希求仕候 大正二年六月十日 敬具 二伸 煉瓦の代金ハ誰れに又何日支払ふべきか 鉄川與助殿 長崎大浦天主堂 ドロ拝」である。
- 42) 與助は、大正2年(1913)は、今村天主堂新築工事に従事している。喜田信代、平井聖、本間博文、羽深久夫：桐古天主堂・冷水天主堂・奈摩内天主堂・今村天主堂の建築工事における関与した人々と鉄川與助の役割、日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)，pp. 199～120, 2005. 9。
- 43) 『杉挽立材買入注文書』は拭板用上小節片面赤身、『松挽立材買入注文書』は小屋及2階根太材、『杉挽立材買入注文書』は柱床枳材で、木質は上等で大節や節腐、割れや曲がり、捻れのない木材を持ち込みの上、1本毎に検査を受け指示の場所に積み立てるとしている。『煉瓦石買入注文書』は、煉瓦を上等煉瓦石とし、寸法(長さ・幅・厚)を明示したうえで、「煉瓦石ハ見本ノ通りノ品質」で、疵捻れの無く、斑が無い上等品に限り、納品は建築現場の指揮の場所へ持ち込み検査を受け、納期、支払についても記す書式である。『石材買入注文書』は、石の産地と寸法を記し、斑が無い上等品に限り、納品は建築現場の指揮の場所へ持ち込み検査を受け積み立てるとしている。『砂買入注文書』は、砂は土気を混ぜない塩分の少ないもので、納品は建築場に持ち込み検査を受けるとし、砂樹の長さと幅、高さを指示し、樹入れの人夫、樹底の掃除、樹の破損修繕は請負者の負担としている。『生石灰買入注文書』は、焼立生石灰100貫目で、八代産品質見本の通り最良の焼立生石灰を購入し、石灰は沸化した後篩粕、又は生々焼石等、最良の正味と引換えるものであり、篩片は最初2分5厘の目篩に掛け、その粕を小蝸で砕き、同様に篩に掛けた粕を砕き同様に篩に掛け、その残り粕を引換え、納品は指定の員数を通知の日より20日以内に建築場内の指図の場所へ持ち込み検査を受け積立てて置くとしている。『セメント買入注文書』は、「セメント(ホートラント)」の品質は鉄道院の規定に合格したものである事、納品は指定の数量を建築場内指図の場所へ持ち込み、検査を受ける事、納入期限は工事の都合により納期を伸縮する事がある、納期を誤り工事に支障を生じた場合は、相当の損害を償う事である。
- 44) 煉瓦の員数調査は、現状の立面写真、及び壁厚から数量の確認を行った。
- 45) 田中豊太郎編(辰野金吾、妻木頼黄博士、三橋四郎の閲覧)：工業書店建築書院，p. 125, p. 127, 1905。
- 46) 長崎には古くから独特の建築材料として、天川(アマカワ)土に貝灰を混ぜた天川漆喰という工法があった。山口光臣：長崎の洋風建築，長崎市教育委員会編，pp. 88-89, 1967. 3。天川漆喰は、赤土が溶け煉瓦の目地が溶けだすことから、ド・ロ神父は、石灰と砂をこね合わせた「ド・ロ壁」を採用した。日本放送出版協会：ある明治の福祉像 ド・ロ神父の生涯，pp. 193-195, 1995. 8。
- 47) 畑中建三編：土木建築工事請負便覧，大蔵書院，1914. 3のノートの頁に、「ドロ様」と「煉瓦トロ割合合 佐野博士実験」と比較して記している。
- 48) 筑後三潁都城島町に荒木貞次郎が瓦工場を営んでおり、今村天主堂新築工事に納入している。
- 49) 福岡県久留米市の城島では、明治期以降の手造り時代の型を基に、現在も製造を継続しており、その所要量は1坪に65枚が基本である。久留米市城島の瓦製造業 今村銀色よりの聞き取りによる。
- 50) 床面積等は、長崎県教育庁芸文課のご教示による。
- 51) 藁の畳床を使わないで板に畳裏を貼り付けた代用の畳。彰国社：建築大辞典第2版，p. 79, 1998. 4。
- 52) 生石灰と砂の身元保証品は、佐世保銀行長崎支店小口当座預金通帳1冊で、預金額は50円9銭である。セメントの保証人は平原猪作であり、身元保証品は80円である。瓦はNo. 16『預り証』から明らかな通り、瓦請負身元保証金50円の預り証である。
- 53) 永井久雄：近代日本建築学発達史4編 建築経済，pp. 673-675, 2001. 12。
- 54) 辰野金吾らの設計による英吉利法律学校(中央大学の前身)(明治20/1887年7月～明治22/1889年12月)では、日本最初の工事請負契約書をつくった。これは、辰野金吾が、英国王立建築協会のものに擬した工事請負契約書を作成して取交したものである。清水建設百五十年史編纂委員会：清水建設150年史，pp. 68-69, 1953. 11。
- 55) 城谷豊：近代日本建築学発達史4編 建築経済，pp. 581-583, 2001. 12。
- 56) 城谷豊：近代日本建築学発達史4編 建築経済，pp. 578-580, 2001. 12。
- 57) 與助は、明治41年(1908)に塚本靖の紹介で日本建築学会准員になっている(建築雑誌第22輯)。なお與助の入会資格は「大工」である。建築学会：建築雑誌二百六十三號附録 建築學會會員住所姓名録，p. 90, 1908. 11。
- 58) 喜一郎氏所有の史料には、魚目水産学校新築工事(発注者は魚目村長、施工場所は長崎県南松浦郡魚目村)の「魚目水産学校新築仕様設計書」と図面があり、鉄川工務店工事経歴書には、実績として記載されている。
- 59) 喜一郎氏所有の史料には、長崎県南松浦若松村の若松村立尋常小学校新築

- 工事(発注者は、若松村長、施工場所は長崎県南松浦郡若松村)関係書類があり、鉄川工務店工事経歴書には、実績として記載されている。書類は①『明治四拾参年第四月 若松村立尋常小学校校舍住宅及附属家新築工事仕様書 五島魚目鉄川用』、②『明治四拾三年第四月 若松村立尋常小学校新築工事費豫算仕譯書 五島魚目 鉄川用』、③『明治四拾三年第三月着一式請負人心得書 若松村立尋常小学校新築工事用 五島魚目 鉄川用』で、いずれも発注者および請負人の署名捺印はない事から写と判断される。
- 60) 田中豊太郎編(辰野金吾、妻木頼黄博士、三橋四郎の閲覧)：和洋建築工事仕様設計事例 上・下：工業書店建築書院，1905、および1908では、工事項目を、それぞれ数字で表している。支払伝票で書き分けられた「一から十六」の漢数字は、司教館工事における工事項目をあらわしていると考えられることから、支払内容から工事項目を数字の右列に示している。
- 61) 『支払伝票』に記された数字は工事項目と考えられることから、その支払先や支払の内訳から、筆者が判断したものである。
- 62) 福田コッパ石は福田岬より産出する石材で、大正時代は松尾福市、田尻喜三郎が権利を持っていた。林純夫：福田村郷土史一大村藩郷村記にみる生活一，pp. 188-189, 2000. 5。支払伝票では松尾福市に支払われている。
- 63) 他に、三重砂運賃22円が含まれている。
- 64) 村川朝松が、明治45年(1912)に製材所を創業し、現在は材木商として出島町で営業を継続している。
- 65) 取引先は、大久保金物(現在も長崎市で操業)、内田鉄工所、石塚商店、高田屋、中津屋、松江商店、柴田仙商店、志賀、佐藤丈太郎である。
- 66) 取引先は、石塚商店、森庄商店、中津屋、松江屋、柴田仙商店、松江船具である。
- 67) 江戸町にガラス商の志賀兄弟商會があり、與助の史料にカタログがある。
- 68) 祝儀は、請負人や臨時雇人夫、煉瓦工と石工、女人夫、木挽と鉄川組に分けて合計97円85銭が支払われている。鉄川組大工と木挽へは、永田3円 前田2円 常助4円 慶輔4円 永田2円50銭 天野2円50銭 前田2円 武石2円 出口2円 丸岡2円 山下2円 前田2円 善吉2円50銭 友吉2円50銭 庄司50銭 永田50銭 外2円で支払合計は37円である。
- 69) この他に、煉瓦揚賃と敷瓦200枚代、鉄川大工手間11日賃、ササ、ガラス、土管、銅製水パイプ代があり、これらは湯場の工事費と考えられるが、左官工事費として精算されている。
- 70) 「借家」については、何を示しているのか現状では不詳である。
- 71) 與助の妻トサの費用は、松江商店の買物代金である。
- 72) 実費精算に関しては参考文献における表記もまちまちであるが、本稿では「実費精算方式」と表記する。ちなみに、稲垣榮三：日本の近代建築[その成立過程](下)、鹿島出版会，pp. 49-70, 1979. 6は、「実費精算方式」としている。山下壽郎氏は「実費報酬加算式施工契約」とし、「工事の担当者が建築工事を施工し、之に対して、利益をこめない実際の費用だけを建築主に負担せしめ、これと同等に従来の利益に替えて、自分の労務に対して適当なる報酬を建築主に出して貰う」契約である(山下壽郎：報酬加算式建築施工契約制度，彰国社，p. 4, 1966. 7)としている。この他、彰国社編：建築大辞典第2版，彰国社，p. 713, 1998. 4では、「実費精算契約」としており、「注文者が施工者に施工を委任し、施工の為に費消した実際の費用と予め定めた手数料としての報酬を施工者に支払う契約方式。(中略) 我国では形式的な実費精算契約は殆ど行われていない。」とある。
- 73) 今村天主堂新築工事(大正2年/1913)では、『新築工事予算書』は2万1723円32銭5厘(1万8989円32銭5厘と人夫賃2734円)で、この他に基礎工事の追加工事費があり、総額は凡3万円程となる見込み。
- 74) 司教館工事における與助の請負金については、今後も、史料の収集に努め、明らかにしたい。
- 75) 明治43年(1910)長崎大浦司教館の設計、建築監督とある。ド・ロ神父記念館：マルコ・マリ・ド・ロ神父小伝，p. 22, 1995. 8。また、日本放送出版協会：ある明治の福祉像 ド・ロ神父の生涯，pp. 232-233, 1995. 8には、明治44年(1911)9月18日、クーザン司教の没後、ド・ロ神父最後の仕事として、「司教館の設計、監督に従事した」とある。
- 76) 解体工事の実施時期は不詳であるが、司教館工事が進行していると判断されることから、予定通りに終了したものと考えられる。
- 77) 工事、並びに材料の請負業者については、西駒太郎は、長崎県東彼杵郡江上村で「牛ノ浦煉化」工場を営業しており、奈摩内天主堂新築工事において煉瓦を納めている。その他についても調査したが、現段階では特定に至っていないことから、今後も引き続き調査を継続していく。

A REPORT ON THE BUILDING CONSTRUCTION WORK
AT THE FORMER HOUSE OF THE ARCHBISHOP OF NAGASAKI

Nobuyo KITA^{*} and *Hisao HABUKA*^{**}

^{*} Graduate Student, Graduate School of Design, Sapporo City University, M.A.

^{**} Prof., Graduate School of Design, Sapporo City University, Dr. Eng.

Construction work at the Former House of the Archbishop of Nagasaki entailed the erection of a stone wall behind the house, and new quarters, toilets, and a basement for the servants. These constructions preceded the renovation of the Former House of Archbishop.

Yosuke Tetsukawa, an attorney of the construction team at Oura Cathedral, signed contractual agreements with the contractors and supervised the construction work. The construction cost exceeded 16,997.553 yen, with cash payments administered prior to September 16, 1913, and “payment slips” thereafter.

The construction costing included the actual cost plus a fee contract system, in which the contractors disclosed the purposes of the expenditure to the Church, and the Church met the actual cost on each occasion.

Planning of the renovations began in 1910, and the construction was completed around March 1915. Therefore, the entire project spanned five years.

(2014年2月4日原稿受理, 2014年5月19日採用決定)